

一八世紀初頭の薩隅方言における「ノ」と「ガ」の 用法

江口, 泰生
鹿児島大学教育学部講師

<https://doi.org/10.15017/11922>

出版情報：語文研究. 69, pp.56-66, 1990-06-03. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

一八世紀初頭の薩隅方言における「ノ」と「ガ」の用法

江 口 泰 生

一 はじめに

九州方言における「ノ」と「ガ」の用法には、二つの問題点がある。

一つは全く文法的な側面で、主格・連体格に「ノ」と「ガ」のどちらを用いるかという問題である。例えば、主格表現に関していえば、専ら「ノ」を用いる地方と、或いは「ガ」を主に用いる地方とがある。今一つは表現的な側面で、「ノ」が敬意を表し、「ガ」が卑称に用いられるという面である。九州方言においても、このような用法を有する地方と有しない地方とがある。

この二つの側面は、必ずしも同じレベルで対立しているわけではないように思われる。というのは、主格や連体格を表すのに助詞を必要とするという事は、文が成立するためには必要不可欠な条件として、「ノ」と「ガ」が二者択一の選択肢として存在しているのだといえる。

しかし、「ノ」が敬意を表し、「ガ」が卑称に用いられるという現

象は、文が成立するために必要不可欠な条件といった類のものではなく、そのような表現をしたほうが好ましいというものである。敬意を表すべきところに「ガ」を用いたからといって、文が成立しないというものではない。

それでは、一八世紀初頭の薩隅方言における「ノ」と「ガ」の用法はどのようなものであろうか。本稿は、以上述べた二つの側面とそこから派生する諸問題について、ゴンザの諸著作を調査する事によって、一八世紀初頭の薩隅方言における、「ノ」と「ガ」の用法について記述するものである。とりたてて目新しい視点や結論があるわけではないのであるが、以下、若干の報告をしたいと思います。

二 『日本語会話入門』における「ノ」と「ガ」の用法

『日本語会話入門』は、ゴンザの諸著作のなかでも会話の例文が掲げられているので、「ノ」と「ガ」の用法の詳細な点を調査するのに先ず適当であろうと思われる。『日本語会話入門』における「ノ」と「ガ」の用例は次のとおりである。用例及び用例の番号は村山七郎

氏『漂流民の言語』によるが、表記に誤りがあると想われるものはその正しい表記を「」に示した。又、用例は必要な部分のみを示し、アクセント符号は省略した。

先ず「ガ」の用例から示す。

- 27*džbat fiŋa* (火がらゝばら) 31 *kazga fiočfjoka* (数が同
 一か) 48*kiwogakare* (植は植まら) 60*fiġanakaja*
 (火が無ければ) 117 *jocgotega saruk* (四丁足駄 (四丁御体) が
 歩へ) 127 *nivatoiga**kojir* (鶏が肥えぬ) 136*kib*
gaje (清い水ぬ) 139*atamaga fagur* (頭が禿げぬ)
 144*nivesaguru* [*nivegasur*] (骨やなく) 153 *ug'justa*
 [*ug'jusga*] *furu* (心臓が振動する) 156*čke kataga* (肩が
 近ら) 178*néranga kurka* (不眠いかなぬ) 179*tam*
ajga kik (理解は理解する) 201*majegakčekara* (死ぬ際に
 は致命的な重態にもなるのだ) 209 *ksasaga sur* (どおちがた
 ぬ) 211*močga nar* (持てたてついでが出来ぬ) 292
kolga arka (原因がぬぬ) 295*surkotiga naradžatta* (不可
 コトガ トルカ

- 能だつた) 300 *fiat arkoŋga ar ckaŋekotiga daišem* (能じ
 誰でも差し支えぬことがあつたのだ) 305*gokga jaŋi* (穀物
 が安ら) 314*koŋga ar* (うじりばなす) 316*ir kanéga*
 (お金が必要ぬぬ) 324*floga naró* (答になぬぬ)
 334*jomocga ar* (書物があぬぬ) 337 *jocč jev(an)g(e)*
ist ga (福音書著者なる人) 338 *icuc kitai mitaiga fion* (人間の
 五感) 339 *loknič' jocosurfiŋga* (仕事する日かの日) 345 *gun,*
cugmé ogani'tga (Sの使徒) 353 *awajekčkara naga* (音節なる
 うじりばな) 409*nukkakotiga ar* (鶏なごうのばぬぬ)
 414*ar nédogga* (穀類にせよミヌかぬぬ) 550*dakna-*
kolga ar (父着なぬぬ) 551*ar tok'ga kaiegajufč'* (幸福
 利益なぬぬ) 274 *daga jobarka* (誰が呼ぶか) 276 *daga*
*orarka* (誰がおられるか) 288 *oigaje* (私を訪問すぬ
 か) 318 *oigaje* (私のうじりば) 321 *toto oiga* (私の父は)
 323 *oiga ikoka* (私が行うに) 407 [*ndaganje*] (我々の
 ナイガ イコカ

上) 615 Jekewa ndaga (我々の生)

以上の用例を通覧するに『日本語会話入門』において「カ」は専ら①主格の場合②「誰」「俺」「我々」という代名詞と体言を接続する場合に用いられている事がわかる。次に「」の用例を示すと以下のとおりである。

56註 Togutromaje (口の前) 56註 Nifonno kotoba (日本語トグツノマエ ニフノンノコトバ)

56註 nifonno kotobe (日本語に) 56註 konatlačno kokore (ニフノンノコトバ コナツチノココロ)

(※前たがの個性) 41 asač [asag] not (昔さ) 50 kak'no umanta (未熟の林檎) 86 kinno kané (金貨) 87 gino kané (銀貨) 90 kabé i'no (口舌) 110 kinocupsa (木の株) 155

agnofjawo (顔) 169 wak'no fia (煙の上) 171 waknofta (煙の上) 209 kssasaga sur um'no (顔死のよらへなべれへたにせうがち)

246 mi'no mama (親はなべ) 254 mi'nomama (親の母)

301 fonnokodža (本邦の上) 312 katak'no majedže (敵にたいへ)

335 furnotto (古いもの) 336 kamno mikawo (神聖なる人) 368 mukafnokot (物語) 378 kotoba nifonno

(日本の会話) 387 safnomama (定規に従って) 389 gramm- (文法的規則) 415 fonnnojfe (種団の上)

atik no fonnokot (文法的規則) 425 kam'hoké (髪) 465 učnofia (上男たが) 478 kun'nofia (市民は)

481 nake kun'no (町の中) 482 fono flowo (正言な人) 484 fonnokot (真実) 490 tokor kanno (神聖な所) 495 učnom-onwo (口舌だやど) 497 fonno učnofte (甜美な口舌の上)

498 iksanimo kajfa (筆指揮者) 532 fonnokot (真実) 544 ano f'nokot (後) 563 fonnofia (正し人) 599 fonnofie (正し人) 601 fonnofia (正し人) 604 dofnokota (友の味方) 611 nifonno kotobe (日本語にたいへ) 407 je no sora (我々の上)

162 čeno faradža (掌) 16 jeno uč (家) 89 kino jok (木の机)

●助詞「」の異形態「」の例

9 nakant (中間的なもの) 24 tadant (あはれたた) 69 ona-

- nkon amaibo (愛知好きの女の干) 168 munenfa (胸の下)
 フコフ フマイホ
- 170 kataranfa (干腹の干) 195 faran fiokat (満腹者)
 カタラチツツガ アキツツガ
 フアラフ フトカト
- 210 čkaran c'joka fita (力の強い人) 278 kiattakot konatan
 チカラフ ツヨカ フタ キヤツカコト コチヤフ
- (到来の・汝の) 318 konatanje (私の・ウイの) 331 fodokén
 コチヤツカエ フマドチヤフ
- maje (神の前) 338 icuc kitai mitaiga fion (人間の五感) 340
 マイェ イツツ キタイ ミタイガ フトフ
- ogantlok' fodokén (祈りにおけなまじの赦免)
 オガントク フマドチヤフ
- 343 towo jekufo fodokén (神の十戒) 398 jowo monon (物の
 トラ ツエツチヤフホマドチヤフ ソボラ モノン
- 本性) 408 bidoront (ガンスの者) 432 unagenkiodje (フ
 ヒロント ヲチヤエツチヤホチヤ
- シド) 459 gosenkendogwo (嫁入り道具) 467 toton kiode (父
 フソエドチヤフ フマドチヤフ トトフ キョヂ
- の兄弟) 522 fodokén ijattakot (父の言われたこと)
 フマドチヤフ イセツカコト
- 526 čunkot (神人) 545 tofnatron fiakota (老人の過誤) 560
 チュンコト トフナツラフ シヤカコタ
- kaneokot (響)
 カネオコト
- 562 torkot fodokén (神意) 563 fonnofa (正し人) 564
 トルコト フマドチヤフ フソノフマ
- fionto (他人の者) 589 fiante (目下の者) 613 kaledje
 フトフ トカフチ カシヤチヤ
- fodokén (神の助け) 619 fodokén ingi (神の名称)
 フマドチヤフ フマドチヤフ イソギ

以上の用例を通覧する。『日本語会話入門』において「ノ」は、後述するような一部の例を除けば、①連体格の場合、に用いられているといえる。

『日本語会話入門』において「ノ」と「ガ」の用法の違いは代名詞に後接する場合を除けば、主格として用いられるか、連体格として用いられるかという違いであり、しかもそれが極めて厳然と使い分けられているという事になる。

しかし、「ノ」の用法には、「ガ」の用法と一見抵触するように思われる例が存在するのである。即ち、次の「1」〜「4」にみるごとく、「ノ」が連体格に用いられるのではなく、主格のように用いられている例である。

「1」主語と「〜か〜か」を有する句とを接続する場合に「ノ」が用いられている例

- 29 kabé fadan ieka warika (壁はだが善いか悪いか)
 カベ フダフン イエカ ワリイカ
- 78 farno monon ju dsekurka dsekenka (肥えた畑が 肥えなごも
 フアルノ モノン ユ チセクルカ チセケンカ
 のか)
- 15 farno firokaka nata jemeka (平地は広いか又は狭いか)
 フアルノ フイロカカ ナタ ジメカ
- 76 jok'no kiurka kijenka (斧の切れるか切れないか)
 ヨキノ キユルカ キエンカ
- 「2」「王」という主語と敬語を含むと思われる述部を接続する場合

に「ノ」が用いられている例

476 kionja ojar ono (首都には王が住む)

キオンヤ オヤルオノ

[3] ロシア語では体言相当の句となっているが、ゴンザの訳では主語十述語の関係になっている例

57 jawara/ka snofogeta (中身が柔らかく成熟した果物)

ヤワラカ スノフオゲタ

66 jag'no faraketa (山羊の腹たてたもの)

ヤギノ フアラケタ

67 jag'no jafeta (瘦せた山羊)

ヤギノ ヤフエタ

71 kijakno medzra/jka (壻)客)

キヤクノ メヅラヅカ

[4] 形容詞を述部に有する場合に「ノ」が用いられている例

75 firmo akaka (真昼は明る)

フリモノ アカカ

203 Iken kawec' sočen samuŕc' utno (どのかわきによつてまた

イケン カワエチ ソチン サムリチ ユチノ

内面的寒さによつて苦しめる)

これらは一見例外的にみえるが、仔細に考察してみると、必ずしも例外とはいえない場合があるのではなからうか。

[1] については次のように考えられる。並列助詞「くかくか」で結ばれた句は、全体では体言句と同等の働きをする場合があるといつて良いのではなからうか。並列助詞「くかくか」で結ばれた句

は、「広いか狭いかを確かめる」「広いか狭いかか問題だ」「広いか狭いかに関わっている」などのように助詞を自由に後接しうる。「土地が広いか狭いかを調査する」というような述語を必要とするのではなからうか。このように考えてみると、「1」は例外というよりも、むしろ『日本語会話入門』において、並列助詞「くかくか」で結ばれた句が体言相当として認知され、薩隅方言訳がなされたという事の現れではなからうか。

[2] については、敬意を表現する必要のある語に「ノ」が接続後続の述部の敬語形式「オイヤル」と照応する事によつて、尊敬表現になっている事を示していると思われる。

[3] については疑問点が大変多い。当該箇所ロシア語は全て体言句である。ゴンザの諸著作においてはこのような場合、「ファラケタト(腹かいたと)」のように準体助詞を伴つて訳されるのが普通である。これらの例は全て「4・質について」という章に属しているのであるが、この章に属する「ノ」と「ガ」の用例一二例のうち、最初から連続するこれら四例のみがこのような普通ではない訳がなされているのである。言葉の問題というよりも別の、例えば本文の伝承上の問題であるかもしれない。ここでは判断を保留したいと思つう。

以上のように一見例外的と思われる例を考察してみると、必ずしも、先に纏めた「ノ」と「ガ」の使い分けに反するものではないという事になるのではなからうか。『日本語会話入門』においては、主格の場合「ガ」、連体格の場合「ノ」という使い分けが徹底的に行われていて、敬意表現の場合に、主格にも「ノ」を用いる事があること

いう事になるのであろう。

そこで、最も問題に思われるのが「4」である。当該箇所ロシア語は「真昼は明るい」であり、その訳として「フィルノ アカカ」という訳がなされているのである。前述の徹底した「ノ」と「ガ」の使い分けからすると、ここは「フィルガ アカカ」とある筈なのである。また「内面的寒さによって」とロシア語にある部分が、「ウチノ サムシチ」と訳されている。これも「ノ」と「ガ」の用法からすると、「ウチガ サムシチ」という文が期待されるころなのである。

このような例は『日本語会話入門』においてこれらのみであり、取り立てて問題にするに値しないのかもしれない。しかし、いずれも述部に形容詞を含み、かつ「ガ」が期待される箇所に「ノ」が用いられているのであって、「ノ」が期待される箇所に「ガ」が用いられているというわけではないという事は注目して良いかもしれない。何故ならば、単語集『新スラブ・日本語辞典』にも同様の例が散見されるからである。

三 『新スラブ・日本語辞典』の「ノ」と「ガ」

『新スラブ・日本語辞典』^{*}に出現する「ガ」を、用法毎に纏めて示すと次のとおりになる。ロシア語訳や出現箇所などは一切省略して示す。

①主格に用いられているもの
アメガフル／アルコトガアル／イエガサムル／イキガキユル／イン

ガウム／ウシガウム／カイエガユナル／カジエガユナル／カジェガ
フク／カムガファグル／キゲンガワルナル／キガファツル／キル
ガフル／ケガオユル／コイエガユル／ゴムガシエン／コレガナラ
ン／シモガファアル／シヨガカレ／スガフォグル／ソングイグ／タヌ
ルコトガアル／タマシガキク／タマシガツマル／タマシガツマル
／チカラガツイエ／ツイガフル／トクガナル／トシガオル／トシガ
ヨル／ナカガユネ／ナミガスル／ニウエガスル／ニジガウカ／ニン
ゲンガタツカ／ネガタツカ／フアナガサス／フィフガワルイ／フィ
マガイラン／フガワルイ／ミミガキカン／フォユル インガ／メガ
イゴク／ユクガフル／ヨイガカカツチヨル

②代名詞に後接するもの

オイガト／オイガマイエ／タガト／ダガト／ヂエム／ワガアルコトノ
アル／ワガアルコトノアルト

③名詞句になっているもの

トシガヨルコト／ミツガアツマルト

前節で纏めた「ノ」と「ガ」の用法からみて、例外となっているのは③の例である。これらが何故、「ガ」になっているのかという点については、重要な意味が隠されているのかもしれないが、いま考えを持たない。

次に「ノ」の例である。

①連体格となっているもの

アザンウカト／アシノイラント／アシノイッタコト／アシノイラン
ト／アナンアルト／アワンウカト／イエノサムルコト／イエノサメ

タコト／イエノサメタン／イエダンウカト／イキノツカユルコト／
 イトシメタト／イランフノモユルトコル／ウミノタルト／オナゴン
 カブルモン／カイエンイエト／カタシケネコト／カタシケノネト／
 カチノナラント／カムノファゲタト／キノサメタフト／キノヂエタ
 ト／キノツマルコト／キノウカト／クサンウカト／クレネコト
 ／クレネト／クレネント／ケノウカト／ケノオイエタト／ケン
 ウカト／コイエンカユルコト／コイエンカユルト／コイエンタツカ
 ト／コカミノウタト／クレネナラント／シタメンウカヒト／シモン
 ファツタト／シヤクノネト／シユルノアルト／シランカレコト／シ
 ヲンカレト／スノフォゲタト／ソソノイクト／タクセコトバンユト
 ／ダマカシノナラント／タマシノキタト／タマシノキカンコト／タ
 マシノキカント／チノタルコト／チエツプンツムルシコ／ツツノウ
 カト／ツソナルト／トシノヨタト／トシノヨッタト／トシノヨル
 コト／ナイノカワツタト／ナイノヨカト／ナカンイエコト／ナカン
 イエト／ナカンユネコト／ナカンユネト／ナムノタツコト／ニノア
 ゲタト／ニンゲンノアツマルコト／ネツノカント／ネンタツカト／
 ファノオユルフォネ／ファノスピツコト／ファダンワルカト／ファ
 ダンワルネト／ファナンツマルコト／ファナンススコト／ファラン
 フトカト／フィノウカト／フィノカクトシト／フィノワルイエコト
 ／フィノワルカト／フノイエコト／フノイエト／フノネト／フノ
 ユネト／フノワルカト／フトンウカト／フォドケンイエイヤツタシ
 ／フォドケンウカコト／フォドケンシヤツタモン／フォドケンタ
 モツタモン／フォドケンミエヤツタト／フォロンウカト／ミノウ
 カト／ミヅノウカコト／ミヅノウカトコル／ミツノヨカトコル／モ
 ドシノナラント／モノソネットコル／ヨイノカカツタト／ワイエメン

ウカト／ワガアルコトノアルト／ワサンウカト

② 敬語を含む述部と照応して敬意表現になっていると考えられる例
 フォドケノミエヤツタ (仏の見えやった) / フォドケノミイエ
 ヤツタ

③ 形容詞を述部としている例

カタシケノネ (かたじけない) / カヲソントヂエネ (顔の徒然ない)
 ／クレネ (位の無い) / チカラソナカ ヨワカ (力の無か 弱い)
 ／ノミノウカ (蚤の多か) / ヨカモンウカ (良か物の多か)

④ 動詞+打消の助動詞「ン」を述部としている例

タマシノキカン (魂の利かん) / ナイノカワラン (様子の変わらん)
 ／モドシノナラン (戻しのならん)

⑤ 動詞を述部としている例

キノツマル (氣のつまる) / タマシノキタ (魂の利いた)

「ノ」と「ガ」の使い分けからして例外と思われる③④⑤のうち、
 述部に形容詞を有する場合(③)に、例外となるものが多いという
 傾向がある。そして、この傾向は「ノ」であるべきところが「ガ」
 になっているのではなくて、「ガ」であるべきところが「ノ」となっ
 ているものが多いという例外なのである。

勿論、この傾向は、述部に形容詞を含む場合に限られるといった
 ものではない。しかし、ここはやはり、述部に形容詞を有する場合
 に例外が多く、かつ、「ガ」であるべきところに「ノ」となっている
 ものが多いという傾向そのものは、一旦は認めておいて良いのでは
 なからうか。そしてその上で、このような例が出現する事には意味
 があるのかどうかについて考察してみてもどうであらうか。もし

て、意味があるとするればどのような意味があるのかというふうな考察を進めていきたいと思う。

四 形容詞に前接する「ノ」と「ガ」の分布の偏り

「ノ」と「ガ」の関係については、これまでにも多くの研究成果が提出されており、既に明らかになっている点も多い。これまでは、「ノ」と「ガ」と敬意との関係という表現的側面の追及、主格を表すか・連体格を表すかという文法的側面の追及、が主な目的であったと思われる。

しかし、ここでは「ノ」と「ガ」の後に接続する品詞に焦点を絞って考えてみたい。主格と述部を「ノ」或いは「ガ」が接続する際に、その述部が動詞である場合、形容動詞である場合、形容詞である場合などの条件によって、要求される助詞に違いはないのであろうか。又、史の変遷についてはどのようなようになっているのであろうか。その概略を纏めると次のようになる。

上代においては「ノとガの下に用言の終止形が来て文の終止する例は未だ無い」ので、連体格の場合について考えてみる。そうすると「助詞ノの下に来る用言を見ると、そこには動詞だけが来て形容詞は来ない」という現象が見出される。

平安時代においても、この現象は比較的多くの作品に見られる。今、手元にある総索引の中から、用例の掲載されているものを幾つか調査してみると表「1」のようになる。用例数は述語に助詞が後接して、文が下に続くものに限った。連体格になっているものを出るだけ省くためである。

表「1」

	主語 + 助詞(ノ/ガ) + 述語 (動詞/形容動詞/形容詞)									
	の					が				
	動詞	形容動詞	形容詞	動詞	形容動詞	形容詞	動詞	形容動詞	形容詞	動詞
竹取物語	1	0		1	0		1	0		1
土佐日記	1	5		1	0		1	5		1
徒然草	4	8		1	1		5	5		2
梁塵秘抄	1	5		1	1		0	0		0
中務内侍日記	6	1		1	1		0	0		0
法華百座聞書抄	3	3		2	0		6	5		5
平仲物語	2	4		3	2		0	2		2
かげろふ日記	5	0		4	3		7	4		0
たまきはる	1	4		4	0		1	0		0
	4	0		0	0		0	0		0
	0	0		3	4		1	0		0
	0	0		7	4		0	0		0
	3	4		3	2		0	0		0
	0	0		0	0		0	0		0
	3	2		0	0		0	0		0

『竹取物語』において「恋しからん事のたへたかく」ななき契のなかりければ」のように、「ノ」に形容詞が後接して述語になるのであるが、「ガ」に形容詞が後接して述語になる例はない。また、『土佐日記』においても同様で、「なほひのあしければ」「かせなみのあやふければ」「うみのまたおそろしければ」等のように「ノ」に形容詞が後接して述語になる例は多いのであるが、「ガ」に形容詞が後接して述語になる例はない。

中世末期においては、主格の場合には「ガ」、連体格の場合には「ノ」を用いるのが普通の状態であったようである。この状態については、次のような記述が参考となるであろう。

その「ノ」の……江口注）主格の示され方は、「ガ」に比しかなりせまい。一文の主語になるのは『史記抄』全体を通じてごく少なく、「ガ」の文主語が二三〇〇近いのになつた二、三例しかない。……「の」が文の主語になつことに消極的であるという形勢はキリシタン本系統でも同様である。……特別の情意のある文の主語になつものに殆ど限られ、平叙文的なものも非常に少なくなっている。

右に引用したように「ノ」が主格に接続する事は、後接する品詞が動詞や形容動詞の場合には、比較的例が少ないように思われる。例えば、『天草版平家物語』において、形容動詞が述語になる場合には、次のように「ノ」と「ガ」との間に文法的な綺麗な使い分けが認められるのである。

●「ノ」形容動詞の場合

①名詞を後接するもの

ギャウギノフハフナコト(3) ヒノノドカナトキ(87) オナゲキノオロカナコト(89) ミノサカンナコト(306) ココロザシノセツナコト(334) ヲンナノ……ユウナコト(335) ヒトメノマレナトコロ(378) ヲノナカノフチャウナコト(382)

②連体形がそのまま体言相当の句となっているもの

ウミノイカニモオホキナヲ(119) ヒトノマコトニキヨゲナガ(276) コズエノイロイロナヲ(372) シカノオソシゲナガ(373)

●「ガ」形容動詞の場合

①連体形で文が終止して感嘆文のようになっているもの

シマニモヒトガマレナ。(60) ナラウコトガムネンナ。(117) シヤウガユルカセナ。(209) コロサセタコトガイコンナ。(226) ココロザマガユウナトアツテ。(302)

②助詞が後接して更に文が続くもの

スイレンガジャウズナレバ(214) オモハウズルトコロガフビンナレバ(250) ツキガオボロデ(283)

つまり、「ノ」は連体格相当の句をつくる場合にのみ用いられ、「ガ」は主格相当の句をつくる場合にのみ用いられているのである。

ところが、「ノ」或いは「ガ」に形容詞が後接して述語を形成する場合、動詞・形容動詞が後接して述語を形成する場合と比して、例外の出現する割合が高いように思われる。例えば、『天草版平家物語』には「ノ」に形容詞が後接し、更に助詞を後接して文が後に続くという例が見られる。

ユイゴンノイトホシケレバ(357)

『天草版伊曾保物語』には

アウコトノナイデモナイ。(89)

のように「ノ」に形容詞が後接してそのまま述語となっている例がある。勿論、これらは全体から見ればごく少数の例外に過ぎないのであるが、この時期の趨勢として、「ノ」は連体格に、「ガ」は主格に用いられるという顕著な事実がありながら、連体格ではない箇所にも「ノ」が用いられている点が注目されるのである。そして、この数少ない例外が形容詞を後接する場合である事に注目されるのである。

現代語において、形容詞が接続する場合、その前に「ノ」乃至「ガ」のいずれを要求するかという点については、『方言文法資料図集』の「4 あの人の色が悪い」「61 字がじょうずに書ける」の地図や『九州方言の基礎的研究』の「主格」の「・「運がよい」の調査報告が資料となる。現代語においては、どの方言においても形容詞に前接する助詞は、当地の主格表現に「ガ」を用いるか、「ノ」を用いるかという事と対応関係を示す。つまり、主格表現に「ガ」を用いる地方においては、形容詞の前であっても「ガ」を用い、主格表現に「ノ」を用いる地方においては、形容詞の前も「ノ」を用いるのである。つまり、述部が動詞であっても形容詞であっても、この場合関与的ではなく、ここにおいて「ノ」と「ガ」の文法的役割分担が完成したと言えるであろう。

このようにみると、上代において、「ノ」に後接して用いられるだけであった形容詞の用法が、「ノ」と「ガ」の文法的役割の分担の完成にいたる直前に、その用法の名残をはからずも露呈するというような事があって、それが中世末期に「ガ」を用いるべき主格の位置に「ノ」を用いる事があるという、例外の出現率の比較的高い事とつながっているとは考えられないだろうか。

もしこのような事がありえたとすると、ゴンザの諸著作における「ノ」と「ガ」の用法は、文法的役割の分担の完成のごく直前の様相を露呈したものと考えられるかもしれない。つまり、「ガ」が主格、「ノ」が連体格、という役割分担がほぼ完成しつつも、形容詞を後接する場合にその分担が緩い場合があったという事なのである。

或いは次のような事情も考えられるかもしれない。『九州方言の基礎的研究』の「主格」の「・「運がよい」の調査報告を地図にし

て重ねてみると、主格に「ノ」を用いる地域と「フノヨカ」という地域とは殆ど一致する。しかし、その周辺地域において主格は「ガ」を用いるが「フノヨカ」を用いる地域がわずかにある。これは、主格に「ノ」を用いる地域の分布に変化が生じたために起こったものか、或いは主格に「ノ」を用いる地域が語彙的な影響を与えたために生じた現象と考えられる。ゴンザの諸著作に反映する「ノ」と「ガ」の用法には、このような隣接地域の言語の影響を受けて、成立した部分があったのかもしれない。

しかし、『日本語会話入門』や『新スラブ・日本語辞典』における例外が隣接地域の言語の影響を受けて生じたものであるとすると、例外に品詞の偏りをみせるのは何故かという問題の回答にはならぬように思われる。

結局は、中央語における、述部の品詞・及び主語と述語を接続する「ノ」と「ガ」の分布の関係を精査した上で、右述の事実との対応関係の有無について考察されなければならないのであろう。しかし、これまで述べてきた資料によって得られた観点から、中央語史を検討してみる事も意味があるかもしれない。

五 おわりに

以上、述べてきたところを纏めると次のようになる。

ゴンザの諸著作において、「ノ」と「ガ」の用法は、先ず、文法的な側面として、①「ノ」は連体格に用いられ、②「ガ」は主格の場合、「誰」「俺」「我々」という代名詞と体言を接続する場合、に用いられるという事が出来る。次に、表現的側面として、③「ノ」は述

部の敬語と照応して敬意を表し、この場合には主格を表すのにも用いられる、と纏める事が出来る。これらは、一八世紀初頭の薩隅方言の「ノ」と「ガ」の状態を示しているものと考えてよいように思われる。

更に個別的な問題点として、形容詞を述部に有する場合に、主格であっても「ノ」を用いる傾向があり、これは中央語史の何らかの反映ではないかと考えられる事を述べた。

諸賢の御批判を乞いたい。

注

- *1 熊本を中心として、主格に専ら「ノ」を用いる方言が分布している
- *2 この「ノ」と「ガ」による敬意表現に分布については、『九州方言の基礎的研究』（昭和四年五月 九州方言学会編 風間書房）の「主格」の「」の分布地図、『方言文法全国地図』（国立国語研究所 1965）の「2 先生が（来られた）」「3 どろぼうが（入った）」「13 おれの（手拭）」「14 先生の（手拭）」「15 どろぼうの（手拭）」の分布地図などが参考になる
- *3 『漢流民の言語』（昭和四〇年四月 村山七郎氏 吉川弘文館）
- *4 訂正は、村山七郎氏から貸与いただいたアッシュ・コレクションのコピー本による
- *5 『新スラフ・日本語辞典 日本語版』（昭和六〇年五月 村山七郎編 協力者井桁貞義 興水剛子 ナウカ書店）
- *6 壽岳章子氏「室町時代語の表現」（昭和五八年一〇月 清文堂）所収「室町時代の「の・が」——その感情価値表現を中心に——」、「日本語の歴史—民族のことばの誕生」（昭和三八年九月 平凡社）三二七頁など
- *7 この段落の引用は、大野善氏「主格助詞ガの成立（上）（下）」『文学』

1977-6・7)による

- *6 『竹取物語索引』（昭和三年六月 山田忠雄氏 武蔵野書院）、『土佐日記総索引』（昭和四年七月 日本大学文学部国文学研究室）、『徒然草総索引』（昭和三〇年八月 時枝誠記氏 至文堂）、『梁塵秘抄総索引』（昭和四七年九月 小林芳規・神作光一・王朝文学研究会 武蔵野書院）、『中務内侍日記総索引』（昭和六三年六月 小久保崇明・若林俊英編 新典社）、『法華百座聞書抄総索引』（昭和五〇年三月 小林芳規編 武蔵野書院）、『平仲物語本文と索引』（昭和四四年七月 山田淑・水野清・山内潤三・木村辰編 洛文社）、『改訂新版かげろふ日記総索引』（昭和五六年三月 佐伯梅友・伊牟田経久編 風間書房）、『たまきはる（健御前の記）総索引』（昭和五四年二月 鈴木一彦・鈴木雅子編 明治書院）によった

*9 前掲注6引用の壽岳氏の論文による

- *10 『方言文法資料図集（一）』、『方言文法資料図集（3）』（昭和五六年一月）昭和五八年一月 国立国語研究所による。全国的にみても、形容詞の前に「ノ」が接続する地域は、主格に「ノ」をとる地域であるといえるように思う

*11 前掲注2引用書による。「フノヨカ」（運がよい）という地域は、主格に「ノ」をとる地域と綺麗に一致する

鹿兒島大学教育学部講師